

2010年11月17日講義8

講義タイトル: ナミビアの歴史について

講師: 永原陽子

キーワード: コイサン、バントゥー、植民地支配、アパルトヘイト、民族移動

### Summary

本講義は、ナミビアの歴史の概略をナミビアを構成する民族・人々に焦点を当てて説明したものであった。講義内容は主に以下の4つの話題に分かれた。(1) ナミビアの植民地化とアパルトヘイト体制、(2) 今日ナミビアを構成する人々の由来、(3) ナミビア南部社会の形成、(4) 記録史料に見るフィールドスクール開講地近辺のかつての様子、である。

#### (1) ナミビアの植民地化とアパルトヘイト体制

19世紀、欧州列強によるアフリカの植民地支配が進む中1884年のベルリン会議の結果、アフリカ進出が遅れていたドイツも今日のナミビアとなる土地を植民地化した。このうち、第一次世界大戦でドイツが敗戦したことにより、その支配下にあった植民地は国際連盟の委任統治領となり、ナミビアは南アフリカが委任統治することとなった。当時、南アフリカではアパルトヘイト体制がしかれており、ナミビアでも同様に実施された<sup>i</sup>。アパルトヘイト体制は、白人と黒人を分離すると同時に黒人をさらに民族別に分離するものであった。これは、数の上で白人を圧倒的に上回る黒人を分裂させ、白人の数的不利を解消しようとするものであった。黒人は民族ごとに定められたホームランドに居住することを強制され、そこにおしこめられ、力を付けることができないようにされた。そのホームランドの配置は実際の諸集団の主な分布位置におおよそ当てはまっている<sup>ii</sup>。さて、その現在の民族分布はいかにして形成されたのかというテーマとともに講義は次の話題へと移った。

#### (2) 今日ナミビアを構成する人々の由来

ナミビアに最初にいた人間とは、コイサン系の人々とされていて、少なくとも150万年前には存在していた形跡があるという。当初は狩猟採集を生業としていたが、2-3000年前に彼らの中から牧畜をする者が出現した。紀元100年ごろダマラという狩猟採集民が到来する。彼らは、コイサン系の言語を話す、バントゥー系の身体的特徴を有している。紀元400年ごろ、ナマというコイサン系の牧畜民がボツワナ北部から移動してくる。1500年代にはサブサハラアフリカ全体で起きたバントゥーの移動の末、オバンボというバントゥー系の農耕牧畜民が到来する。1550年から1600年の間には、同様にバントゥー系のヘレロという遊牧民が到来する。1790年からオルラムという民族集団が、南アフリカのケープから移動してきた。オルラムについては次の節で述べる。

### (3) ナミビア南部社会の形成

17世紀半ば以降、ケープにオランダ東インド会社関係者が定住を開始する。これはヨーロッパから現在のインドネシアなどの東方へ向かう船の補給地とするためである。当地の先住民コイコイの中には、オランダ人植民者の農場での労働を通じてオランダ語、キリスト教、西洋式衣服、銃、馬などを取り入れるものが出現し、そうした者たちはオルラムと呼ばれるようになった。彼らの中には植民者と先住民の混血の者も含まれていた。オルラムは植民者をのがれるため北方へ移動し、オレンジ川（現在の南アフリカとナミビアの国境となっている）より北へ移った。オルラムの有力な首長 **Jonker=Afrikaner**<sup>iv</sup>は当地の先住民ナマの諸集団を征服し、次第に融合していった。**Jonker** が拠点としたところは現在のナミビアの首都ウィントフックとなっている。1870年までにオルラムはヨーロッパ人商人・宣教師の到来により没落し、やがて完全にナマと融合されていく。オルラムと宣教師の到来によりナマの人々の生活も変化し、牛を商品化あるいは象牙やダチョウの羽などを商品化した。

### (4) 記録史料に見るフィールドスクール開講地近辺のかつての様子

フィールドスクールでは、ナミブ砂漠に位置するローイバンク、クイセブ川流域を訪れた。そこは現在は水も緑も少ない厳しい居住環境で、人間も動物も非常に少ない土地であった。しかし、1844年の記録<sup>v</sup>によればナマが4-500人、ダマラも4-500人、ブッシュマンが250人ほどの人々が共存していたという。当時は水も牧草も豊かだったようである。野生動物も多くいて、住民や宣教団はライオンとクロサイを恐れていたという。

上記の4節以外にもナミビア独立闘争やウォルビスベイ、カプリビの成立、現在の政権政党 SWAPO の話題など、多種多様に及んだ。

---

i 「ナミビア」という呼称は1960年代の独立闘争時頃から用いられ始めたものであり、植民地化された当時は「西南アフリカ」と呼ばれていた。本講義においてはこれらの使い分けは強調されなかったため、本報告でも文章を簡潔にするために、時代に関係なく「ナミビア」という呼称を用いることにした。

ii 民族集団ごとの分離・隔離はドイツ支配時代からもなされていた。南アフリカ支配が始まって以降本格化したと言える。

iii もちろんホームランドにあたる地域の外に多くの人々が散在していた。

iv **Jonker=Afrikaner** の「Afrikaner」は、現代の、オランダ系白人民族集団を指す「Afrikaner」とは全く無関係である。

v Carl Hugo Hahn, *Tagebuecher 1837-1860* (Windhoek, 1984)

(報告者：前川護之)